

平成 26 年度 第 1 回 多摩六都科学館組合事業評価委員会 会議録	
日 時	平成 26 年 5 月 29 日 (木) 午後 3 時 30 分から 6 時 40 分まで
開催場所	多摩六都科学館 2 階 201 会議室
次 第	1 開会 2 前回会議録の確認 3 議事 (1) 平成 25 年度の事業評価について (2) 平成 26 年度の事業計画について 4 その他 5 閉会
出席者	小谷委員、佐々木委員、柴田委員、杉浦委員、桧森委員
欠席者	なし
決定事項	●次回会議は7月上旬から中旬の間で開催する。 ●事業評価委員会としてのコメントがある場合は、メールで事務局に送ること。
資 料	(事前配布資料) (資料 1) 平成 25 年度 多摩六都科学館及び多摩六都科学館駐車場 指定管理者事業計画書 (資料 2) 平成 25 年度 モニタリングシート (資料 3) 平成 25 年度 多摩六都科学館及び多摩六都科学館駐車場 指定管理者自己点検・評価報告書 (当日配布資料) (資料 4) 総合評価と評点 (資料 5) 平成 25 年度 多摩六都科学館及び多摩六都科学館駐車場 指定管理者事業報告書 (資料 6) 多摩六都科学館 第 2 次基本計画 (平成 26 年度～平成 35 年度) (資料 7) 平成 25 年度多摩六都科学館組合の科学館運営事業に関する自己 評価
特記事項	次回会議は、7 月上旬から中旬までに開催予定。

開会前

多摩六都科学館組合からのあいさつ（坂口事務局長）

お忙しい中、事業評価委員会にご出席いただきましてありがとうございます。また、事業評価委員の皆さまには日頃より多摩六都科学館の運営にご理解とご協力をいただきありがとうございます。おかげさまで順調な運営を行っておりまして、平成 24 年度は 18 万 1,000 人の利用者数でありましたが平成 25 年度はそれを上回る 20 万 9,000 人をお迎えいたしました。駐車場が 9 月より使用できない状況が続いており、ゴールデンウィークも多くの皆さまにお帰りいただくなどの状況がありましたので本年度も同じような運営といかないかもしれませんが、努力してまいりたいと思います。今年度は、事業評価委員の皆さまのご意見もあり昨年よりスケジュールを前倒しております。そのため、本日も審議いただく内容も盛りだくさん、中身の濃いものとなっておりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

1 開会のあいさつ（柴田委員長）

皆様、本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。

定刻となりましたので、ただ今より平成 26 年度 第 1 回 多摩六都科学館組合事業評価委員会を開催いたします。今回は、組合と指定管理者が行った、平成 25 年度の自己点検に基づいて、委員会としての評定を行いたいと考えます。資料 4 となりますが、今日の会議で、十分に議論を尽くしたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

2 前回会議録の確認

委) すでに見ていただいている方で何か意見のある方、まだご覧になっていない方で発言の内容についてのご意見などがある場合は、事務局までお知らせください。

3 議事

長) 委員長発言、委) 事業評価委員発言、組) 組合事務局発言、指) 指定管理者発言

平成 25 年度の事業評価について

長) それでは、次第 3「平成 25 年度の事業評価について」、事務局の説明をお願いします。

組) 平成 25 年度の事業評価について、ご説明いたします。資料 1 から資料 3 をあわせてご覧ください。昨年度の委員会のご指摘を受けまして、今回から前年度の事業評価のスケジュールを早めました。モニタリングシートによる自己点検・評価報告書を、5 月の事業評価委員会に提出することとしました。資料 1 は、平成 25 年度事業計画書です。こちらはすでにお渡ししているのですが、指定管理者の作成した年間の事業計画については、新たに第 2 次基本計画が策定され、事業の体系が変わったことに対応して、当初の事業体系の変更があり、昨年度の会議でご確認いただいた内容と異なっております。どのような点が変わったかについては、巻末の対応表のとおり事業計画の構成を変更しておりますので、平成 25 年

度の事業評価にあたってご参照願います。また、これに合わせて各事業プログラムの目標設定を見直しました。続きまして資料 2 のモニタリングシートですが、事業計画書で掲げた管理運営方針ならびに個別の事業ごとの目標に基づいてその実績、目標達成の検証、業務改善に向けた対応等を指定管理者で振り返りを行った後に組合と共に自己点検・評価を行ったものです。ここでは、実績・成果の確認と評価の妥当性、目標の妥当性の検証を行いました。その結果が中項目ごとに右肩に評点として出ております。今日はモニタリングシートの細目ではなく、主にこの中項目での委員の皆さまの評価ということになるのかなと思っております。その中項目を大きく包括的に評価結果をまとめたものが、資料 3 になります。自己点検・評価報告書は組合に提出されたもので、本日正式に組合から事業評価委員会に提出させていただくものです。組合と指定管理者で、次の観点に立って自己評価を行いました。まず、1 頁から 2 頁の①から④に示された重点目標・基本方針があります。平成 25 年度は 4 つの事業の方針に基づいて各事業の目標を設定したということになります。各事業の中項目レベルで、目標の達成状況を総括評価するということをまず行いました。次に、各事業の実施状況から抽出された課題や問題点を整理しました。最後に、必要に応じて、検討した改善策を提示する。いずれも、内容は、事前にご確認いただいたとおりですが、特にモニタリングシートの評点は、各プログラムの評点を積み上げて、中項目ごとに右肩の欄外に表記しています。ご説明は以上です。

長) 今日の会議のゴールをどういうふうに考えているかを示しておきたいと思えます。お手元の資料 4 の最後のページに表 6 があります。この表に点を今日入れるということになります。下の方に評価の総評があり、委員の意見を書くところがありますが、先ほど事務局の説明がありましたが、中項目ごとの説明を聞いて委員の意見を聞いて中項目ごとの評点を決めていってしまう。その時にいろいろ出していただいた意見というものが評価の総評のところに行くわけですので、後で意見を出してもらう必要はない。ただし、抜けていた部分などについては事務局に送るが、基本的には今日の議論の中で出た意見を評価の総評として事務局でまとめていただくというふうな形にしたい。事務局が集約したものについて皆さんの意見を出してもらって抜けている部分などがあれば集約する際に参考になるように送っていただきたいと思えます。具体的に各項目の説明を受け、それについてご質問、ご意見をいただきながら評点を決定していきたいと思えます。では、最初に 1. 利用実績から説明をお願いします。

組) それぞれの評価に入ってください前に補足して申し上げますと、今日は中項目ごとに結果的に評点はどようだったのかを皆さんの議論の中から決定したいと思っております、さらに議論の中で出たご意見をコメントとしてこちらでまとめて文章化いたします。それを評価報告書案として皆さまにメールでお送りしますのでご確認いただくというような流れです。スケジュールを早めておりますのは、5 月に評価を固めてしまい、7 月までに委員会の報告書として前年度の総括をしてしまうというふうを考えております。そして 7 月 24

日に組合議会の議員研修会がありますので、その際に事業評価委員会の報告書として提出したいと考えております。約一か月半の間に評価報告書を固めたいということで今日の議論を進めます。

資料 4 を見ていただきますと 14 項目ほどございます。中には比較的簡単なものもあれば少し議論をつくしたり、今日はスタッフ、指定管理者の館長、統括マネージャー、各リーダー、チーフが出ていただいておりますので、直接スタッフに聞きたいという際には直接委員の皆さまからご質問等していただけたらと思います。

資料 3、資料 2 を併せてご覧いただきながらご説明させていただければと思います。ここからは指定管理者の経営管理グループの高橋リーダーよりご説明いたします。

指) 1 項目ずつ簡単に私の方からご説明させていただきますので、その後議論に入っていたいただければと思います。

資料 3 1 ページ 1-2 **利用実績**について説明

要因は 2 ページの中ほどに記載させていただきました。平成 24 年 7 月にリニューアルしたプラネタリウムの人気は落ち着きを見せてはいるものの人気を維持できていることと、平成 25 年 3 月にリニューアルした展示室内に新たに設置したラボを中心に館内の各箇所体験とコミュニケーションを主体とした学習プログラムや常設展示が秋以降に急速に認知され人気が高まっており、昨年度はプラネタリウム人気だけで支えられていましたが、今年度はプラネタリウムと展示室が両輪となって機能したことが最多利用者数更新の最大の要因と考えます。

長) 大勢の来館者が来ていただいたということで実績としては非常に大きな成果があったということですが、皆さんの方で何かご意見ありますか。自己評価では A+ という評価がされています。委員としてはどういう風に考えるのかということに対してご意見いただければと思います。

委) 評点の基準はどういう基準でつけるのでしょうか。たとえば利用人数でしたら何%オーバーしたから A+ というような感じですか。

組) 昨年の基準と同じで A が優良 (目標を達成した)、A+ が優れたところがある、A++ が非常に優れたところがある、ということでプラスしていく。おおむね数字に関しては前年度の 1 割増以上になった場合は A+、さらにそれを大きく超えているような場合には A++ にしても良いのではないかと今年の数字を見て話をしました。

長) 実際利用者数が増えた内容については、今後中項目のご説明をいただく際にそれぞれ集客につながっている点や今までと改善された点などについてご説明があるのではないかと思います。それぞれの方は評点をつけていただいて、全部のご説明が終わった時に直すのではあれば直していただく、それをもとに最終的に委員会としての評点を決めるというふうに進めていきたいと思えます。評価をするときに疑問点や質問があれば出していただければと思えます。利用実績は数字ということになりますが、利用実績につながるいろいろな館の努力があったということだと思えるのですが、それは後からの説明ということだと思えます。

委) 大型映像観覧者数の伸び率が 139%となっていてすごいなと思えるのですが、実数 64,703 人、伸び率は素晴らしいので、伸び率を見るのか、それとも実数でもっと伸ばしたいと思うのか知りたいと思ったのですけれども。

指) 前年度と同期間中の数字との比較について説明。

委) 数の条件ではなく、もっと大勢の人に来てもらいたいと思っているのか。

指) 気持ち的にはもっと増やしてほしいと思っているのですけれども、観覧者数、座席数の限界がありますので、このくらい的人数がマックスに近いのではないかと考えております。

長) 土日と同じようにウィークデーも同じくらいの人に来てくれればよいが、それはやっぱり無理なことでさらに観覧者数を増やすことを考えるのならば、平日に来ることができる人を増やさなければならない。土日だと帰ってもらっているので、増やし方の問題があると思う。

委) 自分の館ではないので、日々の雰囲気を知りたかったので質問しました。

指) 平日シニアをターゲットにした施策を打っているがなかなか認知していただけていない現状がある。ただし、絶対に進めなければならない施策なので平成 26 年度もシルバーの方をターゲットとした施策を打っていきたい。

調査・研究資料収集業務

指) 雑木林関係や収蔵品の整理のを中心と考えていったのですけれども、雑木林に関しては定期的な保全活動を行うことができなかつたが、第 4 のしぜんの部屋で雑木林から持ってきた資料を新たに展示したりということを行っている。収蔵品の方は非常にたくさんのものであり、思ったように整理が進んでいないという状況にある。長期的な視点でデ

一タベース化を含めて地域の科学館としての標本展示の改善を目指します。

委) それぞれの評価項目のご説明をいただいているところですが、なぜ自己評価でそれぞれ A とか B とか C がついたのかの理由についても併せてご説明していただきたいのですけれども。

委) 特に B とか C とかについているところ、A は目標達成ということだから、たとえば A+ とか目標達成よりも何が良かったのかというあたりをご説明いただければと思いますけれども。

指) 調査・研究資料収集業務の評点が全体を見て低くつけてあるのでご説明させていただきます。まず雑木林保護育成プロジェクトですが、関わっている場所と人が大きく変わったという点が言えます。掲げた目標にとりかかるまで、安定するまでに半年以上かかってしまった。そもそもの目標設定自体を変えていった部分もあります。そういう意味においてそのままの目標をできたかという観点からみるとできなかつたので B をつけました。ただ B という評点をつけたのですが、非常に大きな成果もあった。展示室の中で雑木林にあるものだったり、それ以外家の近くにあるものだったりをスタッフとボランティアさんが同じ感覚で季節の動植物を展示したり、解説したりという活動が生まれてきた。今までの目標に対してという達成度で言えば低いですが、ここから次の形は見えてきた。自然環境調査と寄贈品リストの作成は自己評価で C をつけたが、リニューアルを機に体験プログラムに注力する状況があり、腰を据えた調査活動や寄贈品リストをつくるなどのコツコツと地道にやるものの方になかなかエネルギーを割くことができなかった。環境調査の方は今までも 2 名で月に 1 回から 2 回行っていたのですが、日常のローテーションが変更になったり、自分たちで優先順位を下においてしまっていたという反省点があるので、定期的にということができなかったため C をつけました。寄贈品のリストの方はリニューアルで置き場ができたことにより、所蔵しているものがやっと分かってきたが、リストをどのレベルで作るべきかということなど手がつけられていない。

委) 寄贈品を受け入れられる場所がありますか。

指) 正直場所はないです。昆虫と鉱物の標本は、非常にクオリティが良かったので受け入れたのですが、そういった科学館での受け入れ基準というものがない。部分的に活用ではご紹介などしているが、やはり持っている以上はどういうものがあるかという記録を残さなければならぬができていない。平成 25 年度の反省点として科学館で調査・研究を行っていく姿勢を取った以上、プログラムを行ったり、展示室に立ったりするのと同じようなエネルギーの注ぎ方を合間合間で行うというのでは無理だなということが分かったので、それが改善に向けた対応です。

委) 調査研究の資料収集業務で B としたということは、こちらのモニタリングシートで複数項目あるものを各々 B・C・A・A・C・A と評価し、これらを総じて判断すると B という自己評価にしたということだと思いますが、その経緯を説明して頂けませんでしょうか。

指) 合わせたときになぜ B となったかということですか。

委) はい。なぜ B としたか、説明をしていただかないと見えてこないのですが。

指) 小項目が 6 個あるという形になっておりまして、これらを総じると B かな、と思いました。

委) なんとなく、B ということですね。

指) 小項目の中で重要度がすべて同じかというところと違うと思います。ですので、総じるとこのようになるかと思います。

指) 科学館という立場になりますと、コレクションや調査というよりは表に出すものの方がウエイトは高いと思います。ですので、定期調査ができていない、リストができていないという点はあるのですが、表に出す部分に関してはできていたのかなと思います。表に出す部分の達成度を考えると B という評価になると思います。全体として C かというと、多摩六都科学館の考える調査研究というものがどこまでできたかという意味では B ではないかと思います。

委) 追加で配っていただいた資料で、評価の基準一何をもって A とするか、B とするかという定義がありますが、B というのは改善ということで、目標が達成できていない点がある、もしくは内容の改善が必要であるということで、この調査研究・資料収集業務については総じて言うとそのような点が見られるため B とした、という理解でよろしいのでしょうか。

指、組) 意見なし

展示業務

指) 展示業務には大きく分けて「常設展示」と「特別展示」というものがあります。まず常設展示ですが、先ほど言いましたように平成 25 年 3 月に常設展示が更新されまして、その中にラボが作られて、ラボでのプログラムと常設展示の展示品の相乗効果ですごく活性化してきたのではないかと思います。もう一つ展示リニューアルの時のひとつの目玉とし

て「つながるスポット」というものがありまして、この「つながるスポット」と言いますのは、企業・研究機関・地域団体・市民と連携した情報発信の場、ということで常に更新していくという目的で設置をしていますが、内容を頻繁に変えるようなものではないので、むしろもっと全体として「つながるスポット」だけを変更・更新するのではなく、各展示室全体を更新していく方向で考え直したほうがよいのではないかという話の中で、「つながるスポット」だけを更新することができていない、ということでここだけ B にさせていただきました。もうひとつの方の特別展示なのですが、特別展示はいつも春・ゴールデンウィーク・夏・秋・冬・そして翌年の春、と実際は 6 回になりますが、特筆すべきものとしては 25 年度夏の企画展で実施しました「大昆虫展」－これは非常に人気がありまして、例えば 8 月の来館者数が過去最高、しかも過去の 2 番目の来館者数に対しても十何パーセント増えているというくらい来館者を迎えております。それと同時に資料 5 の事業報告書 11 頁にも書いてありますが色々なマスコミに取り上げられたこともありましてかなり知名度向上に貢献しているのではないかなと思います。ということでこれに関しては A+ ということにしてあります。冬は企画が決まるのが遅くなりまして広報が周知しきれなかったところがありまして、計画したほどの来館者が入ることができなかったということでこれに関しましては C にしてあります。全体としては A という評価をさせていただいています。

委) 各小項目に評価をつけていき、総合的に A としたということですが、先程委員がおっしゃったように、おそらくこの項目の中にも重要度に違いがあると思います。重要度が高いものに A が多ければ、多少 C や D があっても全体として A だなと判断されるというように思うのですが。先程の「なんとなく」の意味はそういう意味なのだなと思いますので、今回でなくて構いませんので、重要度についての多少の表記があるといいのかなと思います。

委) 単純化しすぎてしまうと小項目毎に重要度を無視したら A が 3 つあって B が 1 個だから A だ、みたいなふうになりかねませんよね。ちょっと雑な評価になってしまう。

委) もしかしたら特別展示でも全体の数字に寄与した企画と寄与しなかったものがあるでしょうし、また重要であり寄与したものと重要でないけれども寄与したものというのもあると思いますし。

長) 館が全部同じように力を入れるというようにはなかなかいかなくて、やはり頑張るところと、どこに予算や人をつぎ込むかというところがそれぞれにあるのではないかと。とは言っても小項目を削ってしまうのも、あまり関係ないものを削るのはともかくどんどん削ってしまうと館としての魅力が減ってしまうと思うので、館としての方針みたいなものを評点だけでなしに「今年はどれが主に重要項目として頑張ったか」「頑張ったけど人が入らなかった」「頑張ったので人が入った」というのがあるといいと思います。今回すぐにどう

こうというのではないのですが。

委) 企画展示なのですが定量的な目標だけではなく、何を狙いとするかというのを書いていただいているが、主に定性的なものを求めた展示もあるのではないかと思います。極論を言えば、全然お客さんは入らなくてもここでこれをやったことに意義があるものもあるかもしれないということですね。やったというだけでも評価に値するかもしれない。そのあたりの取り組み姿勢というのも昨年度行われた展示の中でメリハリというか何に注力し、何に挑戦したかということも補足していただければと思います。

指) まず2-2の展示業務の方の常設展示室の運営とつながるスポットの更新というものがありますが、常設展示の方は4つのラボをきちんとやり遂げたということが評価に値するのかなと思います。資料3の1頁目、1-3の①のところに589日で4万8千人の利用者があったとあります。これは入館者の4人に1人くらいが体験をされたということだと思います。体験したということはスタッフ、それからボランティアさんと実際のコミュニケーションを行って展示との語らただけではなく人を介したサイエンスコミュニケーションが構築されていたということですので、これが一つの大きな特徴となってプラネタリウムの効果と展示のコミュニケーションの効果が出て20万人を超えることができた最大の要因なのかなと思っています。つながるスポットについては地域の方々の情報を発信することについては、4つの部屋につながるスポットというものはあるのですが、やはりからの部屋でやることと、ちきゅうの部屋でやることと、しぜんの部屋やしくみの部屋でやることとそれぞれ性格が違うので、そういった意味からも各部屋の特徴を活かしてつながりのやり方みたいなものがあるのかなと思いますので、今年は更新の回数が少し少ない、まだやっていないということもあります。ただし、つながるスポットの機能としてはボランティアさんの宝石のコーナーや都市鉱山の展示などもあって、まだ展示の更新に取り組みなくても展示の価値は続いているのかなと思います。それから企画展ですが、近隣の大学と博物館・科学館、市民が三位一体となって博学連携を本当に実現したのは価値が大きいと思います。それからゴールデンウィークの特別イベントのロクトロボットパークについてはDoサイエンス!というものを掲げている中で、実際に工作をするということが随分実施されています。ロボットを作っているのを見て、ああいうものをつくりたい!という入口の部分をきちんとおさえていると思います。工作に参加するのも簡単な工作と指導を受けながらではないとできないものがあり、そういうことをやって工作の楽しさ、ものづくりの大切さを実現できていると思っています。大昆虫展ですが、私共もこんなに人気が出るとは思っておりませんでした。生きている本物の昆虫に触ることがやはり大切だと思います。ただしむやみに触るのではなくて解説員と一緒に虫の触り方・観察ポイントを教えながらお客さまと接する点が人気を博したのではないのでしょうか。自然との関連の中で情報提供ができる・体験提供ができるというようなことを考えています。万華鏡大賞は美しいものと科学の関わりということで例年やっているのですが、映像などを取り入れ、来

館者をある程度増やすことができたのかなと思います。冬の企画展は C となっておりますが、人数的にこちらは C でも仕方ないのですが、26年度は『科学リテラシー』に加えて『地域リテラシー』という考え方を取り入れていこうかなと思っております。圏域の各市の自然のスポット—たとえば柳瀬川や南沢湧水、八国山など自然の宝庫がありまして、場所的にもある程度固まってありますので、生き物たちがネットワークを形成しているのですが、こういったものがあるということを実地で記録に残したので、これから展示の中にフィードバックしなければならぬと思っています。また圏域の皆さんにこういうところがあるので足を運んでもらうための前哨戦的な意味でこれをやっていくつもりです。それから 20 のしくみ展ですが、予算が非常に少ない中、スタッフの能力・スキル開発ができていったので、これはくらしの科学・身近な科学ということでしくみの部屋に後にフィードバックできるようになればよいと思います。最先端の技術も大切ですが、やはり身近な生活の中にある科学の現実もあるとよいと思います。そういう意味ではラボの運営でプログラムを自分たちで作ったというのが、20 万人突破の最大の要因になったのではないかと思います。これをいかに維持していくかが今後のテーマになるのではないかと考えています。

長) プラネタリウム・展示がやはり柱といますかメインということですね。

指) 滞在時間が長くなっているんですね。

組) ちなみにラボでどういったことをやっているかにつきましては資料 5 の 47 頁に記載してあります。

指) ラボがあることで会話が成立するチャンスが増えているんですね。からだの部屋でボランティアさんが長年発見テーブルで取り組んでいたことが各部屋に波及して、話しかけやすい、話しかけられやすい場ができたのではないかと思います。

組) 組合としてもラボは展示更新の目玉でしたので、参加者をなるべく増やすような工夫をしてほしいというのがありました。展示を見に来た人のごく一部しか参加できないため、この魅力が伝えられないので、できるだけオープンにこの魅力を伝えられるようにモニタリングの中でお願いをしてきました。その中で参加率が 25%以上ということは一定の評価ができると思います。

委) ここは参加数と実施日数がでていますが、割ると特にどれが人気なのですか。

指) ワークショップは定員制のものがある一方、五月雨式に 10 分触ったら帰るといようなものもあり形が様々であります。一概にどれが人気かとは言えないところがあると思います。

委) とはいえ、自由研究のヒントを見つけよう！は 5,000 人も来ていますよね。また、つながるスポットですが、私自身武蔵野美術大学におりまして、こちらにうちのパネルを置いてもらっているのですが、なかなか企画をしてもらっているのにもう少しうちから働きかけるべきではないかと常々思っていて、こちらから厚意をいただいているのにうちの学生にとっても私たちが何らかの接点をつくるべきではないかと感じていました。内々の話にはなりますが教養ある美術人を育成するというミッションがあるのですが、一般教養の分野で専任の先生ががっちり居るといって珍しい形をとっておりまして、今年東大の宇宙系出身の宮原（ひろ子）さんという方がいらしたのですがすごく人気で、学生が授業をとりたくてもとれないほどなのです。そのように科学や数学に興味があるのであれば、学校から微妙に遠いですが、学校から見える多摩六都科学館であるのにもかかわらず、なかなか行けていないのが現実なのです。せっかくこのようなことをしていただいていますし、うちの方も美術館を巻き込んで何かご一緒できたらな、と思います。

委) こちらは総合的に A をつけられています、A+にするためにはどういったところを頑張っていくのですか。

指) ラボで学んだことをコア展示に結び付けられていない現状があります。この結びつきをもう少し強化していく必要があると考えています。人間的なことや時間的な制約もあってできておりません。しかし、これをやっていくべきなのではないかと感じています。またこれをフォローするために ipad や IT 系の機材を使うこともあるし、ワークシートにもう少しサイエンスストーリーのようなものを作るとか、ひとりでも巡っていけるような補助教材などを充実させる必要があるのではないかと思います。私たちはあと指定期間が 3 年あるのですが、3 年の間に何とかしたいとも思っています。また、つながるスポットについてもあの部屋に行けばこんなつながるスポット、と見えてくれば良いのではないかと考えています。しぜんの部屋は特に展示の完成度が高いと思うのですが、例えばくみの部屋や武蔵野美術大学のコーナーの活用の仕方、くっつけるプログラムを考えていけばよいのかもしれません。また、これから雑木林を駐車場の整備とともに再整備するのですが、あるべき雑木林の姿を決定するのが難しいのですが、有識者の意見を聞きながら、意見がまとまってきておりまして、スパンとしては 10 年後に素晴らしい雑木林ができるのかなというイメージでおります、こうしたところもしぜんの部屋と「多摩六都と緑と科学」ということで今まで紹介しきれなかったものを紹介してつなげていくようなことをすればよいのではないかと思います。

組) 先ほどのご質問についてですが、モニタリングをやっている中でも色々懸案事項としてでておりまして、改善されてきているところもあるのですが、やはりニーズ参加者にとって人気のあるところとそうではないところをもう少しきちんと把握していこうと組合

からもお願いをしております。その中でいくつか新しい試みも出てきており、例えば聖望学園という飯能にある高校の科学部の子どもたちがラボを使ってのプログラムを行ったり、嘉悦大学の学生さんがラボを活用してプログラムを組むなど新しい使い方が出てきています。今後は新しい可能性が出てくることとっていますが、現在欠けているものとしては学校利用ではないかと思えます。学校団体が来た時にどうやってラボを活用するかが課題でもあります。この点にまだ解決策が見出されていないことを考えると A+まではいっていないのかなと思っています。

委) 利用者数と来場者数とはどう違うのですか？

指) 定義で言いますと、利用者というのは入館された人および館内活動に参加された方としております。来館しなくても参加された方を含めるのが利用者、一方来館者はただ来館した人という意味になりますが、私たちの管理といたしましては利用者という方向で…

委) 企画展示のときの「来場者」という意味の方なのですが。

指) 来館者とは館の中に入る人ですね。来場者とはイベントホールは会場扱いなのですが、そこに入られた方のことを指しています。1回入館して面白ければイベントホールに何回か入りますので、また会場に戻ってきた人も含まれています。従って人気のバロメーターになると思います。

委) 利用者数よりも来場者数が多ければ、人気が高いということでしょうか。

指) 一概には言えないかもしれませんが、それに近い数字がでていないかと思えます。

長) 一回出てまた入ったりするのを全部勘定しているのですか。

指) 入って出て一回なんです。

指) 体験性のあるものは多くて、見学性のもは一回見ればいいかなというところもあると思いますので一概には言い切れないかも知れません。

委) 企画展示についてですが、この 6 個の中で企画した主体が外部であったりするものもあるのですか。

指) 基本的にはゴールデンウィークのロボットパークに関してはある意味委託的な意味が強くなっています。夏の企画展はむさしの自然史研究会に委託した意味合いが強いのですが、これは毎年というわけではなくて今回はむさしの自然史研究会に委託しましたが、今年やろうとしているものはかなり内部の人間が主体になっている企画や運営が多くなると思います。

委) 万華鏡展はどうですか。

指) 万華鏡展は巡回展です。補足させていただきますと外部の方が企画書を持ってきてそのまま採用するというケースはないです。標本を用意していただいたり、手配というものも必ず内部の人間がかむようにしています。

委) ラインナップの考え方なのですが、計画書に興味関心を引くものをやります、日常生活に関係する親しみやすいものをやりますと言及されていますが、中身といたしますか、自然分野・地域に関することに力をいれるのか、科学の分野に力を入れるのかなどラインナップの組み立て方・考え方というものはどうなっているのでしょうか。リニューアルしてまだわずかですが、今後積み重ねていくことで、何を探求し、何を発信していくのか、やることで蓄積されていくと思いますので、それらの見通しなどが見えてくるとよいのではないかと思います。

指) 多摩六都科学館は 1. 2. 3 の部屋がどちらかというと物理だとかしくみだとか技術だとかの展示です。4 室・5 室が地域の自然・地質です。博物館的な展示をしているのが 4 番目・5 番目の部屋です。ですからコレクションしたり調査研究したり、観察を継続的にするとかそういったことをやっていかなければならない。それから一番お金をかけるのは夏の企画展です。できればその中で充実した標本を集めてフィードバックしていくとか、例えば 24 年度に行った夏の元素展では、そのとき作ったものが今チャレンジの部屋にあるのですが、そのように企画展で目玉になってなおかつ展示品としても目玉になるものを多くやっていきたいと思います。あともう一つは企画展というものをお話しいただいていましたが、自前なのかということでしたが、私たちは自前にすごくこだわっておりまして、スタッフが企画もする、解説もする、計画を立てる、お互いに訓練し合うということが私達の掲げている「専門性とエンジョイメントの両立」を実現するのに一番効果的だと思うのです。外部業者に多少値がはったいいものを頼んだとして、それを今後活用できるか、展示できるかと考えるとそれは保障されない。しくみ・人体にフィードバックしていくものと、地域リテラシー—地域から発信されるものを優先順位や重要度を決めて、ここを強化しなければいけないねということを計画に落とし込んでいこうと思っています。科学系と地域情報発信系と二本立てになりますよね。

委) 今のお話を聴いて大変心強く感じました。乃村工藝社さんが指定管理者なので、展示に関して外部に頼らなくても思ったのですが、どう発信してどうコミュニケーションするかというものが無いと良い展示は作れないですね。スタッフの方は大変だと思いますが是非頑張ってやってほしいと思います。本数ですが今 6 本ですが、妥当なのでしょうか。6 本絶対やらなければならないのか、少し減らしても力の入れ方を変えていくのか、それとももっと増やした方が良いのか。

指) 春は(前年度の3月から継続しているため)だぶっているので 5 本ということになると思います。万華鏡はまた別として、実質やるのは春と夏と冬の 3 本ですよ。組合と相談して力の入れ方については、ある程度の調整も時には必要なのかもしれませんね。

委) 平成 26 年の春の特別企画展で単純に計算はできないかもしれないのですが、万華鏡や昆虫よりもお金をかけたものではないにも拘わらず、アンケートの満足度をとっても他の展覧会より微妙とはいえ、高いものになっているのでとても良いものになっているのではないかと思います。もっとここに力を入れることができると良いのではないかと思います。

指) チャレンジの部屋に球を転がす装置だとか、放物線の装置などがあるのですが、通常の科学館で球をむきだしにして自分で転がすことが許してもらえるところはあまりないと思います。全部メカニカル、オートマチックにして規制されたものがすごく多い。結果的にブラックボックスになっていて原理が分かりにくいものになっていることが多いのではないかと思います。そのため、大手の展示業者に頼らなくて平気という点もあると思います。しぜんの部屋でも今はボランティアさんが関わられるようになりましたので、自ら作ったダンゴムシの実験などもできるようになり、お金はあまりかからなくても、コミュニケーションでカバーできるものもあるということです。ボランティアさん含めスタッフは 100 人以上いるわけですから、モノではなく人の力という目に見えない莫大な費用がかかっていると思うのです。

委) コミュニケーションは非常に大事な要素だと思います。

指) 20 万 8,999 人いらっしゃったお客様の満足度が高かった理由の一つとしてラボに注力したというのがもちろんあると思いますが、これにプラスして展示室に立つ人たちの解説力なくしてラボだけではお客様の高い満足度は得られなかったと思います。スタッフの解説力向上というところにも力を入れてまいりました。24 年度の展示リニューアルは開館しながら過酷な状況でリニューアルに取り組んだのですが、25 年度一年間はラボの運営と展示解説の充実に取り組むことができました。以前はプラネタリウムを見に来て、展示室はついでの利用である時期もあり、「他に何かないのですか?」とお客さまに尋ねられること

もありました。「展示室が5つありますよ」とご案内しても「それはもう見ました。他に何かないのですか?」と言われることも、私が受付に立っただけでもかなりありました。今はラボに入門・発展のプログラム・工作・観察を何らかの形で 23.6%の方が体験してくださっています。ただこれで満足するのではなく、スタッフの解説力もまだ向上させなければならぬところもあり、26年度はそこにも力を入れていきたいと思っています。入門・発展のプログラムの充実・開発にも力を入れていきたいと考えています。あと構成市からは学校利用の学習効果が上がっているかどうか確認されておりますので、その辺の実態調査にも取り組んでいきたいと思っています。

委) スタッフの方々の解説力が上がったということですが、その理由としては展示研修実施、展示解説書作成・ツアーマニュアル作成などたくさんこなされたと思うのですが、どのあたりのサポート、働きかけが特に功を奏したかを参考までに伺いたいのですが。

指) 展示リニューアルから始まったと思いますが、スタッフも解説パネル作りから着手しましたので…全部ですね。インフラ整備に徹し、あとは運営次第だよ、という風に取り組みましたので。リニューアル後は研究交流グループだけで 28 名、ボランティアさんはその 3 倍近い 97 名にもなりますがボランティアさんにも 1 週間かけて展示室 5 部屋の解説・案内をして自信をつけてもらい、また初めていらっしゃる方に展示ツアーをしていただいているのでツアーマニュアルをつくり、これに基づき研修をしております。開館以来、展示物の解説書というものがなかったので、リニューアルを手掛けたスタッフが中心になって、内部用ですが研修用資料を作り共有した部分も皆の自信になったのではないかと思います。

天文・映像業務

指) 2 か月ごとに内容を切り替えて旬なプログラムを用意するようにしております。大型映像に関しましても娯楽性と科学性が強い作品を選ぶようにしております。展示・プラネタリウムリニューアルから一年経ちましたが、まだ人気は衰えておりません。この点は素晴らしいことだと思います。

指) 2 か月ごとに 5 人のスタッフが共同してコンテンツを作っています。例えばイラストが得意な者が、メーカーが用意した星座絵ではなく、笑いをとれるようにイラストを描いたり、館特有のテイストを出すようにしている。スタッフの中で解説・コンテンツを作れますので、メインストーリーは既に決まっていますが、自分のプラスアルファを加えてカスタマイズしながら 5 人の特性を出した解説ができるということです。リピーターの方も多くなっています。あの方の解説が聞きたい、というようなことがぼちぼち出てきております。一方で大型映像ですが、4K 映像の素晴らしさというのが今一つわからない、伝わりに

くい現状です。見ていただかないとどうしようもないのですが、最近、ワールドカップ等でも4Kの認識が少しは高まってきたのではないかと思いますので、4Kが4台あることを伝えていけるよう、広報に力を入れていきたいと思います。

学習業務

指) こちらに関しましては総じて言いますと、ラボは気軽に利用できるスポットというようなプログラムを中心にやっております。それだけではなくて学習室ではより体験性の高いプログラムというものも用意しておりますので、多様なプログラムを用意できているのかなと思います。ただこちらの資料にも書いてありますが、常に新しくしていかないと飽きられてしまいますので、こちらの点が一番の課題なのかなと思います。講演会ですが、こちらは一番記憶に新しいところでは11月30日にノーベル賞を受賞された方2人に講演を行っていただきました。その中で「大人も楽しめる科学館ブランド」というものを今後挑戦していき、生涯学習の拠点として確立していきたいなと思っています。大人・中高生以上の人々をターゲットに入れていきたいなと思っています。25年度はそれに合わせていくつかプログラムを組むようにしております。

長) 何かご意見はございますか。

長) シニアの中でサイエンスカフェを利用しておもしろい話が聴けるといのはどうでしょうか。そのためには閉館時間を考えなければいけません。月1度で第何週の何曜日には閉館時間を延長してやっているというのは、他館ではよくありまして「あそこにいつ行けば面白い話が聴ける」と思ってリピーターが増えたりするようです。そういう風になればいいのかなと思いますが、ただし閉館時間が17時だと難しいですね。館独自で定着したイベントができればいいなと思います。

委) 京都に行ったときに、京大がいくつかサイエンスカフェを行っていて、結婚したカップルが沢山いたそうなので、この館の趣旨に合うかわかりませんが、人と人との出会いを生むような場になることはすごくいいなと思いました。

委) そういう成果があると噂にもなるかもしれませんね。土曜の午後か夕方に定例的にやれたらいいかもしれませんね。

学校連携・支援業務

指) 学校の支援というところで、現在学習投影というものを行っております。圏域の小学校4年生が対象で東久留米市だけは全校ではないのですが、他の4市の小学校4年生には殆ど来ていただいております。それ以外の市の近隣の学校にも来ていただいております。今は4年生だけではなくて6年生用のプログラムも作ったので今年の2月に各学校への案

内の中に6年生用のプログラムを作ったことを告知したところです。今2校申し込みがあったところです。これは来年度以降も広めていきたいと思っております。学習団体のラボの利用ですが、ラボでも学校団体向けのプログラムを作りました。各市の研修の受け入れでは職場体験、博物館実習、インターン受け入れ等基本はすべて受け入れる方向でやっております。学習支援については以上になります。

委) アウトリーチがBになっているのはどうしてですか。

指) アウトリーチは目標ではもう少し数多くやるという目標だったと思うのですが、基本的には申し込んできたところだけは受けたのですが、こちらから積極的にやりますよ、というアナウンスはしておりませんでしたので、計画には満たなかったのかなというところがあります。従いましてBにさせていただきました。

長) 東京ガスの実験とかはこれからどうなるのですか。

指) はい。東京ガスさんには今まで液体窒素を使った実験をやってもらっていたのですが、危険ではないかということで、こちらをしなくなり、代わりに中で新しい実験やラボを使ったプログラムというものをこれから開発していきます。

組) 補足ですが、さきほどの重要度で言いますとアウトリーチが重要ということですが、なかなか指定管理者さんにとって厳しい話かもしれませんが、ニーズということでいいますと、圏域からのニーズが非常に高く、特にここからアクセスが悪い地域からの要望が高いので政策的な意味でいいますとこの重要度は大きい。ただ、それに対してついていけない部分もあることからBということになっていると思います。

委) 自己点検の評価報告書では「学校の利用実態が分かっていない」とありますが、これはどういうことですか。

指) 平成24年・25年なのですが、学習投影で来館してそれ以外の時間は30分いるのか1時間いるのか、その間何をやっているのかつかみきれていないところがあります。今年からすべての学校団体の先生にアンケートをお願いするようになりまして、良かった点、やっていたこと、改善した方が良い点というようなことを伺っております。

委) 東久留米市だけ全部の学校が来ていないということですが、どのような理由なのでしょう。何か働きかけはしているのですか。

指) 各市教育委員会や市からの補助の状況が異なるため、来ることができない学校があると聞いています。

組) あとはアクセスバスがないという問題があります。特に東村山からこちら側までは非常にアクセスが悪いです。アクセスの悪い学校はバスで来るしかないので市の補助がないと厳しいということになります。

委) 逆に市の補助ができるようにすることはできないのですか。

組) 組合としては構成市に確認をしているのですがすべて補助することは難しいようです。ただし、構成市の議員さんの中からそのような状況はまずいぞ、という話は出てきております。

委) もっと能動的に働きかける、という手だてはないのですか

組) はい、そうですね。あまり決め手になるようなことを今すぐにはできかねます。財政的な事情もあることですのでじっくり議論していかなければならないと思います。

委) 教員研修に関してですが、だいぶ成果があるように見えますが、このあたりの手ごたえはいかがですか。

指) 都教研というところなのですが、昨年度から研修をはじめております。東京都教職員研修所のセミナーは殆どが 23 区内で行われるので、多摩地区では当科学館が唯一の会場ということで非常に高い評価をいただいております。これも科学館でやるんだというような特徴をこれからどんどん出していければと思っています。

委) インターンの受け入れは打診があったときのみ受け入れるということですか。

指) そうですね。今のところは私共から積極的にやりますよ、というのは打ち出してはいないのですが、だいたい学生さんのほうから「やっていますか？」と聞かれたときは基本的にやっているとお答えしております。大学の方から問い合わせをいただき受け入れをした後平成 24 年・25 年・26 年も引き続き受け入れの要請がきたという形になっております。

委) ちなみにどちらの大学ですか。

組) 早稲田大学です。以前連携していろいろな事業を行っていたのでそのつながりがあるのではないかと、受け入れがしやすかったのではないかと思います。

地域・拠点事業

指) 地域拠点事業として一つは多摩・島しょ広域連携活動助成事業というものがありました今年実施いたしました。今年度は小学生が中心となりまして、圏域5市プラス青梅市で、自然に特徴のある場所、例えば西東京市であれば東大演習林、そのほか八国山ですとか柳瀬川ですとかに観察・撮影に行き、撮影して映像をつくり、ドームで投影するというようなことを行っております。資料でいいますと事業報告書の26ページになります。もう一つは地域連携ということで、第2次基本計画の中で重要になると思われる部分になりますが、色々な地域の方々との連携を平成25年度から実施しております。こちらと同じく事業報告書の27ページに記載させていただいております。NPO法人・学校等様々な圏域や近隣の団体とイベントを行っております。

指) 多摩・島しょ広域連携活動助成事業は各市がどこに行くかを決めますので、必ずその市の人が行くわけではなくて、いろいろな地域の人が入ることになります。ですから、圏域の小学生たちの横のつながりができることになります。今年度の自然がどのようなものであったかというものが記録に残りますので、一種の映像標本ができるような感じになると思います。科学館としても重要な仕事になるのではないかと感じております。今後4年おきに記録をしていくとかそういう効果も期待できますし、子どもたちが大人になったときにこの映像を見て、これらの自然がどう変わったか、自分がどう係っていたのかピンポイントとしての科学館だけではなく、地域の圏域を見たときに、サテライトがけっこうあるんだなということも認識してもらえる良い機会だと思っています。このような効果も狙って、毎年東京都の市長会の方から助成金を得て、構成市と協力して実施させていただいております。

指) あとは地域拠点として、市民の代表であるボランティアさんにご協力いただきながら、いろいろ支援させていただいている形であります。

委) ボランティアの活動ですが、どういう関係を築いていこうとお考えなのですか

指) 基本的にボランティアさんは、科学館の最大の高度な利用者であり、ある意味ではパートナーであると考えております。ボランティアさんの規約もボランティア自身で作っておりますし、交通費を含め、私たちは費用をお支払いしていませんので、完全なボランティア事業です。非常に意識が高く、ここの科学館を自分の科学館だという意識で活動をしていただいております。ある意味、地域の科学館の最大の役割を担っているのではないかと思います。

います。何より皆さん毎日楽しんでいらっしゃると思います。地域の一般の方々・地域の子どもたちを自分達が育てていくんだという高い志があるように感じます。ですのでボランティアを「育成する」というのはおこがましく、ともに協力し合っていると思っています。

委) ボランティアの方々が出機する部屋や集まる部屋などはあるのですか。

指) あります。ただし狭いです。

長) 極地研の成果はどうだったのですか。

指) JPA 総会を6月3～5日にやらさせていただきました。プラネタリウムの施設を持っているの方々・関係者・機械のベンダー・映像のベンダー等が3日間に渡ってこちらで総会を行った際に、オプションツアーとして極地研のものをやりました。良くなかったというわけではないのですが、オプションツアーと言っていたので、普段見られないものが見られるのかなと思っていたら普通のツアーだった、ということになってしまったように思います。

顧客開発

指) 平成24年度は試行錯誤していましたが25年度になり、これから顧客を増やすにはどうしたらよいかということで、自分達、そしてここに来る人たちのプロフィールを知ろうということでアンケートの取り方を変更いたしました。従来、館内のアンケートは置きっぱなしで書きたい人だけ書くような形でしたが、すべて声掛けをして答えていただく形にしました。それと同時に非来館者・非利用者ということで5市の市民祭り、産業祭りでもアンケートをとらせていただきました。あとは開館20周年記念で市民の方が無料で入館される際にすべての方に協力していただき、合計で6,500件ほどのアンケートを集めることができました。これを分析し色々なことが見えてきたのかなと感じています。その中でシニアの方々を何とか誘致したいと思い、シニアの方にどうしたら知ってもらえるかと考えた時に、一番効果があると思われたのが市報でした。今までロクトニュースとか色々やっていましたが、昨年11月に市報が一番効果があると分かってからは、かなり頻繁に市報に情報を掲載させていただいています。同時に顧客開発ということ言えば、学校になると思いますが、先程申し上げたように6年生を狙いたいと思っています。もっと圏域を広げることも考えています。今は学習投影では圏域の学校の校庭を映すことにしていますが、圏域外の学校ではそれがありません。しかしながら、三鷹市・青梅市の学校が沢山来てくれていますので、今年から、これらの市の学校の校庭も投影できるようにしていこうと思っています。友の会ですが、昨年度の1.5倍の1,500人が入会してくれています。これから友の会を少し変えていきたいと考えておりまして、年間パスとしての利用者と、賛

助会員といますかパートナーとしての会員と分けていきたいと考えております。条例が絡みますので、組合と相談しながらできれば来年度からスタートさせたいところです。

組) ちなみにアンケートですが、資料 5 の 53 頁から掲載されています。

委) 回答者の年齢で 50 代・60 代の割合が極端に少ないと思うのですがこれは何か理由があるのでしょうか。

指) 基本的には色々な年代の方に声掛けはしております。高齢者の方々はやはり全体的に少なかったであろうと思います。昨年度入館システムを変えまして、その中に年齢を入れることができるようにしたので、来館者すべての年齢構成が分かってくると思いますので今回のアンケートの結果とクロスさせれば、年代別のどういうことをやろうとしている、どういうことに興味を持っている、どういうことからこれを知っているなどの正確なものが出てくるのではないかと思います。

委) 友の会の会員になるのにはどうしたらよいのですか

指) 館内で申し込みをしてもらいます。

委) 会費はどうするのですか。

指) その場でいただいております。

委) おいくらになるのでしょうか。

指) 家族会員が 4 人まで 5,000 円です。子どもが 1,000 円で大人が 2,500 円です。

委) 友の会の会員が 150% ってすごいですね。今どこの館でも友の会には力を入れていますが、150% というのは考えられない数字です。どういうふうにされているのでしょうか。リピートしたいと思う人が多いということなのですかね。

指) そうですね。やはりラボには「ここに来れば何かできるんだ。」というような意識の高まりがあるのではないかと思います。

委) 目標達成の検証で「友の会のメリットを認識させ」とありますが、すごいなあと。認識させてしまうのかと。というのがすごく引かかるのですが。こういう表現が他の資料でも見られますが。

指) 表記し直します。

広報・PR

指) 広報・PRに関してはさきほどのアンケートの結果からだいぶ年齢と認知媒体というのが見えてきていますから、それに合わせた広報を昨年の11月位からはじめております。まず近隣の来館者に対する市報、アンケートによりまずと圏域市民が35%・65%が圏域外ということになっておりますので、はじめての方(と圏域外の方)向けというのがWebの活用だと思います。只今この2つの方法に力を入れているのと同時に、従来からやっている科学館ニュース—これは圏域内外の小学生20万人に配っておりますが、こちらもずっと継続しております。昨年度からはじめたのがチラシです。事前広報の必要性を感じ、例えば夏休みの企画であれば、せっかく人が来るゴールデンウィークにしなければならない、秋の企画展であればせっかく人がたくさん来る夏休みに行わなくてはいけないというように常に前々に広報をすることを心掛けております。このやり方を24年度から始めております。ホームページや広告媒体そして田無駅にデジタルサイネージを置かせてもらったりもしております。メディアに関しましても、イベントに関しましてはすべてプレスリリースするようにしております。大きなイベントの場合は「来ませんか？」と誘客用のプレスリリースと取材の方々を誘致するプレスリリースを行っております。かなりたくさん新聞社さんにはご協力いただいております。テレビ撮影も依頼があれば内容を考慮して受け入れをするようにしております。プロモーション活動では先程申し上げましたようにアンケートをとるといことで各市の市民祭等に行かせていただき、科学館の知名度を上げるために、その場で簡単な実験をしながらアンケートをとるという形で行っております。ペガロクが2年前に当館のキャラクターとしてデビューしたものの、認知活動を行っていなかったのので、ペガロクⅡの上映に合わせて、色々認知活動を始めています。

委) 大学ではフェイスブックを使っている人は少なく、今はLINEの時代になっています。フェイスブックは写真も掲載でき、掲載できる情報量が多いのですが、年齢が上の方々がフェイスブックを好む傾向があると思うので、シニア向けの媒体としてもっと活用したら良いのではないのでしょうか。科学館ではブログはしていないのですか。

指) ロクトリポートはやっていますね。

委) ブログはフェイスブックほどではないですが、情報更新ができるので活用ができるのではないかと思います。

指) 館内で取るアンケートによると認知度のきっかけとなる媒体の1位はWebなんです。

館外では市報がトップになっています。しかも館内アンケートでは市報は2~3%で、逆に館外でWebを選ばれる方は5%くらいと本当に両極端になっています。すごく興味深いデータだとは思いますが。

委) ちなみに今フェイスブックの「いいね!」はどのくらいなのですか

指) 733です。

委) それはやっぱりおかしいと思います。もっといくはずです。どう考えても。ここでしたら絶対3,000~5,000は来るはずですよ。

委) プロモーション活動の中で開館20周年記念の感謝デーについては成果があり、過去最高の来場者数とのことですが、この手応えをどう活かしていくのですか。

指) 今回は20周年ということで大きなイベントを行い、開館記念ということで圏域市民感謝デーを行っていたのですが、今回は特別な節目でしたので入館無料に加え、お祭りをやるということで圏域5市のキャラクターショー・屋台・グルメフェアなどを行いました。今回の資料にはないのですが、そのときもやはりアンケートを取りまして、比較的うまく行ったのは清瀬や東久留米・東村山から「はじめて」いらっしゃった方がかなり多かったということではないかと思えます。今回は無料のシャトルバスも出しましたので、これを利用された方も大勢いらっしゃいました。またアンケートによりますと、圏域市民とはいえ、半数以上の方が車で来られるようです。一番近い田無や花小金井からバスが出ていても不便ということで。あとは自転車などですが、それ以外の方はやはり来にくいのであろうなと実感しました。

長) 多少不便でも、慣れてしまえば気にならないと思うのですけれどもね。はなバスでも30分に1本出ていますし、そんなに使い勝手は悪くないのではと思いますが。やはり屋台やお祭りというのも20年に1回というのではなく、これからもやっていったらいいのではないのでしょうか。

指) 初めての来館者・非利用者数に対する目標値は意外に少なかったんですね。2日間で5,000人くらいいらっしゃったのですが、うち3,000人が圏域で2,000人は圏域外でした。目標をどこに定めるかだと思うのですが、お祭り自体は皆さんももちろん喜んで参加していらっしゃいました。産業振興課の方々・商工会の方々ともとてもよい連携がとれました。この点は成功だったかなと思います。

長) 近くでもこの館を知らない人がいるとも聞きますし、お祭りなどをやるとそういう方々

にも知ってもらえますから。

指) 野菜を買いに来たシニアの方々にも「はじめて来た」とおっしゃる方もいらっしゃいました。

組) 少し付け加えますと、グルメフェスティバルは各市の産業振興課と商工会の力をお借りしました。意義としては地域活性化というのは大きなテーマだと思います。各市とも商店街や農業の問題を抱えているので、少しでも事業者が元気になれるようなイベントをやりたいということで、各市単位では市民祭り、産業祭り等を行っていますが、それを超えて 5 市広域でやるチャンスは中々ないのが現状です。そういう中で催し物ができれば広域行政の核がこの館であることをアピールできるよい機会になるとと思います。単純に人を集めることができるという評価ではなく、政策的な評価をしていった方がいいのではないかと思います。これは設置者の意図を大いに含んだ事業であると思います。

長) お祭りをやって各市の議員に来てもらったら良いですね。

組) 実際お忙しい中、議員さんや市長さんも来ていただきました。そういう意味でも良かったと思います。

運営管理

指) 過去最高の来館者数となりましたが、その中で大きな問題や事故がなかったことは大いに評価できると思います。ただ 1 点、倉庫に不審火があり、その際の消火活動はすぐに対応できたのですが連絡に不備があり、最終的には消防への連絡がかなり遅れてしまいました。そのために優良防火対象物の認定を取り消されてしまいました。あと駐車場に関しては臨時駐車場が使用できなくなり、ゴールデンウィークもかなり沢山のお客様にお引き取りいただいたということが発生いたしました。圏域の市民とはいえ、5 割のお客様が車を使って来ているわけですので、新しい駐車場ができる予定があるのですが、完成は来年の 2 月と伺っておりますので、夏休みも迎えますが、お帰りいただくようになると科学館離れが懸念されます。これが大変怖いので新しい駐車場ができてからどうやってお客様を引き戻すかが一番大きな課題だと思います。

長) 今年はお帰りいただかなければいけないお客様がまだいらっしゃるとは思いますがいつ新しい駐車場ができるとかお詫びの気持ちとか、チラシにしてお渡しできるといいのではないのでしょうか。

指) 今、実際色々やっているのですが、止まっている車の方々にそういったものをお渡しするとかえってクレームを言われてしまうようです。外部の業者の方に、下手にスタッフ

が出るクレームになるケースがあると言われ、たしかに一理あるなと思いましたので、なるべく出ないようにしております。

長) 一回帰ってしまうと、またどうせだめだろうと思われてしまうこともあるのではないのでしょうか。新しい駐車場が出来るとも知らずに来なくなってしまう可能性もあるので、何らかの形で新しい駐車場の PR をしたいところですね。

指) 今戦略でいいますと地鎮祭か何かを行った時にロクトニュースに掲載してドームの工事の時に行っていたように「ここまで工事が進みました」と状況をお知らせしたり、新しい駐車場ができるということでそれに合わせてお祭りをやるということで考えております。

委) 駐車場に関しては 20 周年の時にずっと見ていたのですが、警備員の誘導が役に立っていませんでした。西側から東側に向かう車に入れれないと言ってもそこで待ってしまう。待ってしまう車をどかす・流すことができないというのがあり、どんどん後ろに列ができてしまう。一方で東から西に向かってくる車もあり完全に道がふさがった状態になってしまっていて、あまりにも誘導が素人ではないかなと思って見ておりました。駐車場が空いた時の誘導もうまくできていなかった。これはクレームになるなと思って見ていました。

委) 安全管理面ですが、避難訓練は定期的に行っているとのことですがどういった訓練をしているのですか。

指) 基本的には煙感知器を鳴らし、どこで発報しているから消火班はそこに向かって確認しなさい、発見したら消火活動をすると同時に、避難誘導班が避難誘導を開始する。発火場所に応じた避難誘導路へ誘導する。そして最後に集合場所に集まるという形でやっております。

委) シナリオはあるのですか。

指) はい。大体 2 か所くらいで発報するとかで、サプライズ的な形ではないです。

委) シナリオ付きの訓練は全員出勤しているときにやっているかもしれませんが、実際毎日全員出勤しているわけではないですし、管理職もいないかもしれない。訓練の日時を決めて、一部の人にだけ想定内容を伝えておき、地震や火事に応じていかに俊敏に対応できるかということを訓練しております。お客さまが 20 万人を突破するのは凄く嬉しいことだと思いますが、お客様がいらっしゃればそれだけリスクも増えるということですね。その中で台本があると台本通りにやってよかった、自分の役割を果たせたというようなこ

とになってしまう。なんかこう目的と手段がおかしなことにならないように次回以降お願いしたいと思います。

長) サプライズ的な訓練をして、実際できるかどうか大切です。消火器と AED は全員使えますか？

指) 使えます。4月に全員に AED の研修を行いました。9月は消火器をやろうと思っています。

指) 過去に2回誤報がありまして、それが訓練になってしまったこともあります。

指) 前に障害をお持ちのお子さんが非常ボタンをぎゅっと押してしまって非常ベルが作動したこともありました。そのときに実際同様の避難誘導にあたるということも年1回くらいあったりもします。

指) プラネタリウムの上映中ではなかったのですが大騒ぎにはなりませんでしたが、これが上映中だと結構大変なことになったと思います。

委) お客さまを巻き込んででも事前に訓練を告知してやってみてもいいかもしれません、実際動けるかどうか。

指) この前消火訓練をしたときにはじめてボランティアさんに参加してもらったのですが、難聴者向けの光るボタンをつけたのですが、半数位のボランティアさんがそのボタンに気が付いていませんでした。突発的なものも何らかの形で必要かもしれません。

委) 不審火というのがありましたが、連絡齟齬の原因と対策と再発防止というのは練ったのですか。

指) その日のうちにまず担当者に集まっていたいで知らせ、別途研修をしております。

委) 何がクリアできたら再度優良対象物になれるのですか

指) まずは2年経たないと申請できません。

自主事業

指) 自主事業ですが、昨年度かなり良くなかった点が目立ったのですが、スタッフが慣れ

てきたこともあり、大きなクレームもなく、昨年に比べスムーズに運営できたのではないかと思います。ミュージアムショップでも色々なミュージアムの売れ筋商品を活用してご好評いただいています。カフェもショップも昨年に比べればやはりサービスの向上が図られていると思います。ゴールデンウィーク・お盆などはカフェの座席・休息場所が少ない、ショップの窓口の狭さ、自動販売機が開館中に売り切れになってしまうなどの館のボリュームを超えてしまう問題もあり、一朝一夕では直るものではないので組合に相談しながら、長期的に改善しなくてはならないのではないかと思います。

経営管理

指) リニューアル以降、豊富なサービスが提供できていることと、アンケートによりますと来館者の満足度が高いという結果が出ていると思います。個人の力量はありますがもっと組織立った形でサービスの改善を図って行こうというのが1点と、スタッフに基礎的な科学力が少し不足しているかなと思われるところもありますので、こちらに関しましてはこれからどんどん教育をしていきたいなと思っています。運営の効率化に関しましては、収支としては平成24年度・25年度ともに想定以上の利用者がありましたので、組合へ還元金として平成24年度は600万円余、平成25年度は1,000万円余が計上できるかなというところです。経営管理のマネジメントの課題としては、乃村工藝社本社からの支援でスタッフへの教育・システム導入・人事・経理等は十分ではありますが、乃村工藝社が指定管理者であるという利点を活かしかれていないところがあると思います。これは強みですので、この強みを活かしていく施策がとれたらと考えております。

委) 乃村工藝社さんは複数の施設の指定管理者になっていらっしゃると思いますので、利点を一番活かすのに各施設の職員同士の交流というのがあるのではないかと思います。必ずしも科学館ではないとはいえ、基本的には集客施設・文化施設ですから、そこでの集合研修みたいなものやっていたら、職員同士が交流したり、あるいはグループワークのようなものをしてお互いの悩みを解決するようなことが非常に有効ではないかなと思いますのでぜひそういうことをやっていただきたいと思います。

委) 乃村工藝社さんが指定管理者であることの利点はどのように考えていらっしゃるのか。

指) 展示のトップ企業であることが一つ、また今おっしゃられたように10館以上の運営をやっていることが一番大きな利点ではないかと考えます。

委) よく言われるのが、特定の指定管理者がミュージアムなどの複数の施設の指定管理者をやっているとコンテンツの使いまわしをするぞと、いいコンテンツであれば広めるのはいいのですけれども場合によっては手抜きといわれることもある。今日のお話を聞いてい

てそうはならないなと思いますが、ミッションを達成するためにはどうするかの見極めが非常に重要だと思います。また、人材育成ですがリニューアルを経て組織体制が変わり、リニューアル後の離職率というものはどうでしょうか。

指) 非常勤の方が正式な職場を得た場合は移られます。また、常勤の方で離職された方は3名おります。非常に特殊な例があった場合はお辞めいただいております。

指) 人材育成の一つにはなるのですが、企画の魅力とかプログラムの充実、もう一つ大事なのが接客だとやはり思っていて、JPA 総会でアテンドの心得、多摩六都のおもてなしというのを初の天文分野以外のポスターセッションに参加させていただき、そこでアテンドがやっている個人対応、細かい交通案内から迷子の対応、安全管理、団体の方に対しての細かいサービスなどを発表し、他館の館長さんなどに興味深く見ていただいた。こういったかたちでアテンドだけでなく、館の職員のモチベーションを上げるためにも研修も統一していきたいと思います。

委) 専門性が必要なスタッフの方々の勉強会や研究会とか、展示開発などで忙しいとは思いますが、もう少し中長期的な視点で互いの知識を共有し、能力を高めていく取り組みは何かあるのでしょうか。

指) 他館で参考になるような企画展の見学や視察も一つかと思います。寄居に川の博物館があり、都内では水道歴史館とお台場に水の科学館がある。水の歴史館では江戸の水道の展示をしていて玉川上水が目玉になっている。今日水道週間に合わせて水道の歴史という内容のサイエンスショーを科学館でできないかというお話があった。私たちも2年間軌道に乗せることに集中していたので、やっとこのように声をかける余裕ができたのかなと思います。また機関誌に館の活動が掲載されるなど自分が行っていることを外部からの評価をとおして分かってきているような状況になってきています。

指) 勉強会というのは時間の制約もあってなかなか難しい状況にあります。ただこの場合、リニューアルを内部の人間が手掛けた、自分たちが活動する場所や訴えることを自分たちでつくったということがあるのでその後のプログラムもチームで考えながら、あるいはチームを超えて協力したり、プログラムや企画展をやる中でお互いの持っているものを共有できているかなと思います。チームで専門が違ってもプログラムに共に取り組む、手伝いをするうちに学問的な専門性というよりも自然観というものだったり、地質をやっている人は地球をこう見ているんだ、自然をこう見ているんだ、生物をやっている人はこう捉えているんだということがラボのプログラムなどお客様と直接話す、質問に答えているうちに自然と共有されてきたことで、個々の部屋のテーマとも結びついてきている。多摩六都の文化醸成、多摩六都で行っている科学の提供や見方がスタッフの関わりでできて

いるのかなという風を感じています。

委) いい方向を継続的に進める仕組みを続けていく必要があると思うんですね。担当している、専門分野の違いを乗り越えて自分はこのことをやっているよということを共有できる場を意識して作っていくとやっていくと次につながっていく、そこをマネジメントして組み込んでいき、しくみ化していく必要があると思います。

指) 基本計画のワークショップでもありましたが、多摩六都は企画を推進していく部分が弱いね、という話になったと思いますが、経験をしたことのないスタッフが少しでも経験をしたことがあるスタッフとやってみるといようにすべてをOJTでやるだけでやっていかなければならないのかもしれませんが、それだけではなく、良い意味でモチベーションを保たれた状態でどう進めていくかということを考えていくのもよいのではないかと思います。

指) 座学的な研修はあまり意味がないのかなと思います。「聞いたことは忘れる、見たことは覚える、話したことや教えたことは身に付く」といいますが、この意味ではプログラムを自ら開発して、披露してやりとりをするというのは教えていることになると思います。それと、私の経験なのですが、1つの科学館で設計・納入をしたりするとかなり詳しくなります。見に行ったり、本を読んだり、偉い先生の話をお聞きに行ったりすれば身につくかといいますとちょっと違いますが、現場で見るポイントなどを実際に教わったりなどして結構良いOJTになっているのではないかなと思います。ボランティアさんの中に素粒子の専門家の方もいらっしゃいますし、化学の研究者の方もいらっしゃいますし、エネルギーや石油に精通していらっしゃる方もいます。質問できる人材はいくらでもいます。非常にそういう意味では恵まれた環境にいるのかなと思っています。自分が伸びるテーマさえ決まれば、その材料(チャンス)はあるわけです。かなりスタッフの伸びしろは大きいですし、2年間で変わったなと感じています。

長) スタッフと来館者間のコミュニケーションですが、説明をしないといけないのでその部分についてももう少し知らないといけないよね、となりますよね。

指) 毎日チーム毎に終礼をしております。その中で課題を共有するようにしております。

長) 本を読んで勉強するというのももちろん基本ではありますが、教えるために勉強するのと復習とか予習のために勉強するのでは全然違うと思います。人に教えるとなるとやっぱり必死になりますよね。

指) どうしても分からない時があると思いますが、そういう時は館長や猪郷先生がいらっしゃいますから最後の砦で聞くのですが、それは別格です。目からうろこが取れるような

ことを色々ご享受いただくので、非常に恵まれた環境です。

長) これで説明は一通り聞きましたね。それでは一個一個やっていけばよいのですかね。

委) 総合評価に入る前に1つ質問なのですが、高柳館長さんはリニューアル前後に多摩六都科学館にいらした方なので、リニューアル前後にどのような変化があって、これからどうなっていくのか一言お伺いできればと思います。

指) そうですね、不連続になるのかなと思っていたのですが、前に持っていた伸びしろが活きるような形でずっと継続してきたと思います。今日委員の皆様非常に意欲的な活動が目立つような評価をしていただいておりますけれども、そのように対応しているということは、前歴が活きているというふうに私は評価しております。私自身は現場にいない人間ですので、現場の活動などを見て、非常にいい勉強をさせていただいています。中で皆さまがされているふるまいや知識を活用させていただいて外での確かな仕事をして、館のことをPRしております。そういう意味では逆に皆様に感謝をしております。

長) ありがとうございます。それでは評価項目ですが、利用実績については、皆様のご意見はいかがですか。

長) 利用実績はA+。調査・研究・資料収集業務はB。これについてご意見がある方はいらっしゃいますか。

委) こちらは中項目でCがあったんですね。全体の考え方なのですが、この評価委員会の結果が来期以降に跳ね返る効果を考えたときに自己評価が高いのは良いと思いますが、やはり厳しくつけた方がよいのではないかと私は思います。小・中項目にCがあるのであれば一番きついCを全体の評価にすることによって来期以降注力して動いていったほうがはっきりするのではないかと思うのですけれどもいかがでしょうか。

委) あとで配られた評価基準ですと、Cになりますと「目標がほとんど達成できていない」ことになってしまいます。

委) ただ小項目でCがあるときは中項目で一番低いものをつけなくてはならないかどうかは議論していくと良いと思います。明らかな平均点でやっていくのであれば同じように評価委員会もしていくと良いと思うのですが、私としては評価委員会としてはやはり厳しくした方が良いのではないかと私は思います。次回以降ここに注力してくださいね、というところを明確にしていくと良いと思っています。

委) 小項目に C があるかどうかではなくて、項目ごとのプライオリティ・重要度が分からないんですね。全体では A になっているけれども、もう少しこの項目は頑張っほしいよねというのはあると思います。

委) では C になった項目はどうするのか、評価委員会としてコメントをする・しないというのが少し抜けるような気がするのですが。その辺はどういたしましょうか。

C なら C で、C があるけれども中項目評価に C は出てこないわけですよ。25 年度においては改善すべき項目が何もないという結果になるわけですよ。そのあたりをどのように解釈するのかということだけは明確にしておく必要があるのではないかと思います。

委) 今聞いている範囲では C がついていたのは小項目で、全体の評価を C として「抜本的な改善が必要である」というのはどうかと思います。

委) 私としてはこの評価自体 (A、B、C という評価) もおかしいなという気がしているのですが。これだと A が平均ですよ。A が平均でいいと言えば A が平均でいいのでしょうけれども。今年この評価基準を変えるわけにはいかないからこれでいくとしても、これで評価をして中項目を見ていって「もう何もやることはないよ。満点なんだよ」ということになるのは何となくまずいんじゃないかなという見方を投げかけている訳で、その結果、どのような評価をするのかというのはそれを踏まえたうえで全体が A なら A でよいとは思いますが、ただ本当に満点なの？ともう一度問い返す必要はあるのではないかと思います。

長) C でも収集資料のリストができなかったとありますが、できたことにこしたことはないが、できなかったからといって非常に悪い結果を生むかというところと他のことが忙しくてできなかった、となるとプライオリティが落ちていたものが C になっているという感じがするんですね。全部がそうかどうかは分かりませんが、そういうことも含めて皆さんの方から「こういうところは絶対まずいから、改善が必要である」とか自己評価が良くても評価委員としての評価はそうではないというのはむしろ下の欄に書いていただいた方がよいのではないかと思います。こちらとしては中項目が本当に C なら C、改善があるなら B と思いますし、この評価結果は色々なところに入りますから、委員会として励ますために C を付けたという意図が伝わるかというところと伝わらないと思います。これは駄目だったんだな、としか伝わらなくなってしまうので、コメントのところにとりきり理由を書いた方がよいのではないかと思います。コメントであればいくつかの意見が出ると思うので、今日議論した中のもも事務局で整理していただいてそれぞれのところに議論の意見が出てくると思うんですね。それについて自分はどうしてもこう思うというところを皆さんから事務局にお伝えいただいて、それで下の欄に書いていただければ。その中にそういう意見があったということでそれはよいのではないかと思います。

委) 正直 A-ってないの?と思います。それから B+もですね。「もう少し頑張っよ」というのを表現するのに。

委) 私としては今コメントさせてもらったことだけでいいかなと思います。

長) おそらく次期のときに小項目のプライオリティ的なものを、大・中・小位のプライオリティにするのか、大・小で表現をするのか分かりませんが、それと実際の達成度というようなものがあると、同じ C でもだいぶ見方が変わってくると思いますので、これはちょっと検討して欲しいと思います。そういうのが全部できた段階で、全体 C だよねとか B だよねとか場合によっては同じかもしれませんが。

委) ですが C が2つあって、もし大事な項目に C がついているのならば、全体は B ではなくて B-にするとか。

委) B にもいろいろあると思います。プラスに近い B だとかマイナスに近い B だとか。次年度以降こうやって取り組まれたらどうかと書いて、きちんと明記しなければいけないと思います。

長) ですから調査研究・資料収集は全部が満足できたというわけではないので B ということにします。それから展示業務はいかがでしょうか。色々お話を聞いたらもっと頑張ったなという気がしたので A+ではないのかなと。まあ、でも A ということで。

天文映像業務は A でよろしいでしょうか。

それから学習業務。これも特にありませんか。

学校連携・支援業務。(特に意見なし)

それから地域拠点事業に関する業務。

長) 地域拠点事業は以前に比べたらこれはだいぶ力が入ってきた気がするのですが、今後期待して、さらに良くなるように A ということで。次回は A+を目指して欲しいと思います。

委) 顧客開発は A+でも良かったのではないかと思うのですが。アンケートの取り方を変えて傾向を把握したりしていますし。友の会についても先ほど委員からお話があったように 1.5 倍というのもありますし。

委) ただ狙ったシニアを開発しきれていないと言えますね。

委) 課題が見えてきただけでもそれが評価に値するとも思うのですが、スピード感がちょっと見方が分かれるかもしれませんね。

長) 期待を込めて A にしておいたらどうでしょうか。来年 A+がいくつか出ると良いと思います。広報・PR は。(特に意見なし)

サービス業務については、混雑した時のサービス等が課題ではありますしね。

それから安全管理業務。これも本当だったら A-。A-はないから意見として安全のことについてはくれぐれも、ということを書いておくことが必要かなと思います。

それから設備管理業務。駐車場関連だと思いますが。狭くなってしまったのはこちらの努力ではどうにもならないので、なるべく早くスムーズに新しい駐車場のことを伝えるようにしてほしい。自主事業は特にないでしょうか。

委) カフェ等改善されたようですので。

長) 経営管理・マネジメント、それから総合評価。これは平均ということなのでしょうが、利用実績が非常に上がったので A+でもいいかなという気がしますが。やはり A でしょうかね。駐車場が完備して、来年以降今年が減ってしまう可能性があるのですかね。

指) 約 10 パーセント減るかなという感じです。ですから 19 万人くらいでしょうか。

長) 新駐車場ができてどれだけ(利用度が)上がるかでしょうね。それでは A にしておきましょうか。ということでほとんど自己評価と同じ評価になりましたが、改善が必要なものについては総評にしっかり残すようにしたいと思います。

4 平成 26 年度の事業計画について

組) 平成 26 年度の事業計画ということで、本来本日皆様のご意見を伺うべきでございますが、実際今指定管理者から 3 月に提出されているものが、この時点では基本計画の新たなスキームが反映されていなかったということがありまして現在急ピッチで改訂作業を行っております。これには基本計画策定業務の受託者の方にも作業に加わっていただき、基本計画との連動性や業績指標の適切な設定によって評価システムとの有効な対応が図れるようにしているところです。また今日委員会からも前年度の評価をいただいたということで、それに係る具体的なご意見も頂戴いたしましたので、今年度の事業計画に反映させていきたいと思っております。そういったことを踏まえて 6 月末に改訂作業を終えまして、皆様にご確認いただくようにしたいと思います。受託者の方もいらっしゃることですし、その辺の流れを簡単にコメントさせていただきます。

基本計画受託者) 現状の事業計画と事業評価は先ほどから出ているように、あまりメリハリがなく、全体を見ていく形になっているのですが、この基本計画ではどの方向を目指していくかということが明確になっておりますので、重点的な指標や目標が定めやすくなっており、それに合わせて事業計画の頭の部分の重点目標、今年度の重点目標や指標を定めていって、そこを皆様にも重点的に見ていただくように、少し事業評価も楽になるのではないかとこのように考えております。その一環で、市民モニターという形でこちらにピンク色の紙がございますが、今年度は試行的に友の会の方たちに協力していただいて、基本計画や今年度の重点目標というものを直接市民の方たちからご意見を伺うという形をとっていきながら、それも併せて調整していきたいと思っております。

長) ありがとうございます。

組) 引き続きまして、資料 6 の第 2 次基本計画について手短にご説明します。資料 6 に関連しまして、財政計画を策定いたしました。基本計画の中身については個々にご確認いただけたらと思います。一番重要なポイントとしては地域拠点事業を始めるということで、これまでは科学館の中核事業を堅持しつつ、先程『地域リテラシー』という言葉がございましたが、今後いかに科学館が地域との係りを深めていけるかというところにもう一方の軸足を置いた計画になっております。これはあまり科学館でこのような構えをとっているところは見ることがなく、本当に科学というテーマとセットできるのかという素朴な疑問としてあるのですが、ただ私たちが考えている科学は非常に広いものを含んでいることから、様々な事業の連携も進む中で、その地域の中で一定の役割を果たしていけるのではないかと確信しております。今後 10 年間そういうスキームに変えましたので、従来中核事業だけで構成されていた事業計画が、地域拠点になるという視点でどういうふうにサイエンスティックにしていくかが一番大きな課題になると思います。これに連動しました財政計画は、今お配りしたとおりなのですが、大きなポイントとしては持続的にやっていけるかということでして、構成市の財政環境が厳しい中でこの科学館をどう持続的に運営していくかというところを計画によって示しております。一番大きなポイントは、駐車場を作るために用地を購入したのですが、これにより貯金をかなり吐き出してしまい、施設整備のための貯金がかかなりなくなってしまったので、今後リニューアルや施設の老朽化に対してどう対応していくかが大きな課題であります。借金を返しながらかつ基金にどうやって貯金をしていくかこの点についても、もう少し長期的に老朽化対策を考えていきたいと思っております。この点が財政計画上の課題としてあります。最後に資料 7 のところに、今申し上げました駐車場の事業も含めまして、組合の科学館運営事業に関する自己評価を進捗状況も交えて一覧表にしました。組織市や設置側としての事業になりますので直接的には事業評価委員会で評価する対象ではないのですが、ただ 25 年度からについては第 2 次基本計

画の策定と駐車場整備事業という大きな内容が出てきましたので、組合としてどう取り組みをしたかということをお示ししました。まず第2次基本計画の策定については先ほどご説明したとおりなのですが、目標に挙げてあります3つのことを、策定委員会を設置し、ワークショップなどを行い、スタッフやボランティアさんにも参加していただき、皆の計画とすることができました。ただいま出席していただいております村井さんにもご協力いただき、また佐々木さんにもご意見をいただき、様々な方々からアドバイスを頂戴しながらしっかりと計画することができたと思います。ただ計画だけで終わることがないようにというのが一番大事な事であり、しっかりと使える計画にしていきたいので、そのために先ほど申し上げましたように事業計画に取り入れて、連携するなどきちんとしていきたい。また毎年、計画が少しでも現実にそぐわない部分を見直していきたいと思います。続きまして2番目の駐車場整備事業ですが、目標としては用地購入とそのための財源の借入、緑化型の事業というものを挙げております。隣地を購入することにより自前駐車場ができ、現在借りている賃借料を削減できるということは科学館の経営上大きなメリットとなります。また、行政財産が大きく従来の1.5倍くらいの非常に大きな敷地規模となりますので組合としても固有財産の管理という点からも大きなテーマとなりました。今後自前になれば時間貸しなどのサービス向上も図れるということで構成市の理解を得ることができ、東京都から借入れをすることができました。用地もすでに購入が済んでおりまして設計をしています。設計は8月に終え、9月に着工、来年の2月には完成する予定です。今年度の春休みには何とか間に合わせたいと思っております。

長) どこが持っていた土地なのですか。

組) 個人の農業の方がお持ちの生産緑地だったのですが、農業をやめるということで。(譲っていただきました)

委) どちら側の土地ですか。

組) 東側です。袋路になっており、道路に面していない土地でした。ただ議員さんや構成市の市長さんの要望から出ておりますのは、車が入る進入路として雑木林三分の一くらいを削らなければならぬため緑地の減少になることから、緑というものを意識した駐車場開発にしてほしいとの要望があります。近隣周辺住民の方々のことを考えて、駐車場ができたから環境が悪くなってしまったということにならないようにしたいと思っております。緑化型の駐車場というのをなかなか難しいテーマなのですがプランニングに入れております。続いて3番の財政計画の策定については先ほどご説明したとおりとなっております。4番目の長期修繕計画というのは、財政計画の先を見越したものとなってきますのですが、施設の長寿命化というのが今一番大きな課題となっております。一般的にこのような施設ですと30年すると、エレベーターや空調機などインフラの部分が非常にだめになってきて、大規模

改修ということになってしまうのですが、そうすると億単位のお金がかかりますので、いっぺんにはできないということで大変大きな問題点です。さらにこういった学習施設は、長期的な価値を持っているものとして長く使えるようにしていかなければならない。価値の保全ということを含めて最適なプランを立てなければいけないと思っております。今、そのための施設の老朽化の状況とかどういふふうに設備を改修していったらよいかという優先順位を考えるための調査段階がほぼ終わりました、これからプライオリティをつけて劣化状況に対応した大規模改修とか機能の改善などの工賃に着手するというような見通しを立てたいと思います。財政の問題も併せて考えていかなければならないというのが組合の宿題です。最後の施設の補修、維持管理については施設の安全性の向上、老朽化対策などを指定管理者さんと協力して進めていくということで、細かな施設の修繕等は指定管理者さんをお願いしていますが、ガラスの飛散防止フィルムや防犯カメラの設置をするような安全対策のこと、屋上に手摺を設置して屋上で天体観望会ができるようにするとかの施設の価値の向上や冷凍機（空調機）の劣化対策などを実施しております。これも長期修繕計画と連動するのですけれども、やはり適切に維持管理していくために組合として一定の役割があると連携して取り組んでいきたいと考えております。これらについては、実施の状況や今後の取組に向けての考え方については逐次事業評価委員会にご報告いたしまして委員の皆さまのお考えをお聞きしながら長期的なプランに反映できるようにしたいと思います。

5 その他

組) 事務局からお願いとお知らせ 次回会議のスケジュールと委員の任期について

平成 26 年 7 月 24 日 (木) の議員研修会の際に、委員の皆さまにおまとめいただいた評価報告書の説明をさせていただきたいと思っております。また、委員の任期が平成 26 年 7 月 16 日 (水) までとなっておりますので、次回の会議開催の予定ですが、7 月の上旬から中旬の間に開催させていただきたいと思っております。主な議題は平成 25 年度の評価委員会の評価報告書の確認と平成 26 年度の指定管理者事業計画の検証ということになるかと思えます。また、平成 26 年度の事業評価委員会の開催は特段の事情がない限り、全 2 回、次回の 7 月の会議で終了となります。お配りいたしました日程調査票へのご記入のご協力をお願いいたします。のちほど事業評価委員再任のご意向をお一人ずつお伺いできればと思っておりますのでこちらについてもご協力をお願いいたします。

長) ではこれで長くなりましたが、本日の会議を終了いたします。今後ともよろしく願いいたします。